



出来事への期待

東京大学名誉教授（元第5部教授）

原 広 司

初めて生研に勤めた時、いきなり今は故き池辺教授から生研の建て替え計画をせよと申し渡された。今から30年ほど前のことである。以降事ある度に、修正あるいは新案を作成し続けてきたのであるが、次第に様子が解ってくるにつれ、「狼少年」を相手にしているような気分になり気力が萎えてきたのも事実である。

岡田所長の時代に、駒場Ⅱへの移転が検討され始め、やがて原島所長の時代には、全学のキャンパス計画室が実現され、本格的な計画案の模型などを作っても、私は実現性については全く信じていなかった。

ところが、現在、5期にわたる研究棟のC棟は完成して、一部移転が行われ、B棟とD棟が建設中である。その次のE棟とF棟も設計図書を既に提出済みの事態なのである。一体世の中は、どうなっているのだろうか。建築家として、私はいつも不思議に思ってきたところである。まさか、こんな建物は実現する筈がないと考えて、思い切り大胆な案を提出しようと思った大阪の連結超高層は現に建っているし、京都駅の案にしても、国際コンペで勝てる筈もないから、せいぜい理念的に立案しておこう位に考えていたら、ジャーナリズムから逃げ回る破目に陥った。世の中では、あまり信じていないことが実現するらしい。

有馬総長、吉川総長の時代に、東京大学ではめずらしく、大学総体としての合意が実現された。少なくとも私が東京大学にお世話になっている間では、唯一回の出来事である。文部省がその気になったからと言えばそれまでと認めざるを得ない現実はあるにせよ、大学全体の意志を一つにまとめあげた同僚たちの、まことに敬意を払うにふさわしい人間像が想起される。建築の同級生である岡田所長（当時）はもとより、私の印象に強くその人間像が刻み込まれたのは、吉川教授、原島教授、そして、法学部の井上教授である。生研の移転が好ましい結果となるのか、さしたる出来事ではないのか、それは解らない。しかし加うるに文部省から東京大学に出向いていた当時の佐藤事務局長と施設部の大谷部長がいなかつたら、柏をはじめ、3極構造の実現はなかつたろうと思う。

あまり期待できない出来事を起こすのは、私の経験では、意外に少人数の強い意志である。建築家である私は、そうした人々が決定に持ち込んだところを実現するだけで、意志もさして強くなく、とても総意を築く力はない。こうした出来事を起こす人々は、概して明るく、おおらかであり、少なくとも事の重大さに気づいていない振りができる。実は、振りではなく気づいていないのである。この点については多少心当たりがある。もともと貧しく育ち、金に無縁の大学に居たから、数百億円といった工事でも全然驚かない。駒場Ⅱのプロジェクトもこのオーダーの工事であるが、事の重大さなど、全然気づいていない。

ノーベル賞を受けたボルヘスという文学者が、カフカ論で示唆に富んだことを述べている。彼によれば、歴史を因果関係で説明するのは誤りであり、ある出来事が偶然起きて、そこから過去に逆行して系譜が作られるのが歴史である。文学の文脈からカフカが必然的に登場するのではなく、カフカが出現して文学史が系統的に構築されるのである。おそらく、幾度となくテーブルを囲んだ底抜けに明るいメンバーは、偶然の組み合わせであっただろう。たまたま、事の重大さに気づかなかつただけなのだ。

と言つても、建築の実現には、名誉なことと知りつつも、多少の苦勞がある。生研の歴史はどう展開するのか解らないが、私の心境としてはノーベル賞の1つや2つはとつてもらわないと、割に合わない仕事ではある。